

屋島活性化シンポジウム ～世界に誇れる「屋島」を目指して～

開催日時 平成24年7月14日（土）
午後2時～午後4時30分（受付 午後1時～）

開催場所 サンポートホール高松 第2小ホール
高松市サンポート2-1 高松シンボルタワー・ホール棟5階

主催 屋島会議 高松市

プログラム

14:00	開 会
14:00～14:15	挨拶 高松市長 大西秀人 高松市議会議長 大浦澄子
14:15～14:45	基調講演 テーマ「屋島活性化基本構想（仮称）中間報告について」 屋島会議会長 京都大学大学院経済学研究科教授 植田和弘
14:45～14:55	休 憩
14:55～16:25	パネルディスカッション テーマ「世界に誇れる「屋島」を目指して」 コーディネーター 植田和弘（屋島会議会長 京都大学 大学院経済学研究科教授） パネリスト 北川フラム（瀬戸内国際芸術祭 総合ディレクター） 金田章裕（人間文化研究機構長） 佃 昌道（高松大学・高松短期大学 学長） 村田和子（旅行ジャーナリスト）
16:30	閉 会

（敬称略 50音順）

● 挨拶

【高松市長 大西秀人】

皆様こんにちは。高松市長の大西秀人でございます。主催者を代表いたしまして、一言御挨拶を申しあげたいと存じます。

本日、「屋島活性化シンポジウム～世界に誇れる屋島を目指して」を開催いたしましたところ、このように大勢の皆様の御参加をいただきましたこと、まずもって、心から御礼を申しあげたいと存じます。

さて、御承知のとおり、四国霊場第84番札所屋島寺を始めとして、源平合戦古戦場としても名高い屋島は、瀬戸内海国立公園ならびに史跡天然記念物にも指定されており、その歴史・自然などにおいて多様な価値を持ちます、高松市民がまさに誇りとする、かけがいのない財産であるものと認識いたしております。

また、日本書紀に記されております古代山城の一つでもございまして、国内外にとって、貴重な文化遺産である「屋嶋城跡」が平成14年に発見されましたことによりまして、文化財としての屋島の価値が更に高まるなど、屋島再生に向けて好ましい進展が近年は見られているところでございます。

しかしながら、屋島への観光という面で見ますと、観光客の数は、昭和47年の246万人をピークとして全体としては長期低落傾向にございます。20数年前の瀬戸大橋開通時の賑わいを最後に、最近では60万人前後で観光客は推移しております。屋島の保存と効果的な活用ということが、文化財保護や観光振興の観点から、高松市にとりましても喫緊の課題となっております。

こうしたことから、屋島の保存と活用による活性化を図るために、屋島活性化基本構想、仮称でございしますが、基本構想を策定しようということにいたしております。その策定に当たりまして、広く意見をお聞きするために、昨年8月に環境や文化財などの専門家を始め、市民の皆様、関係機関が一堂に会します「屋島会議」を設置し、現在、多角的な視点から検討を行っております。

本日のシンポジウムは、まず、この屋島会議の会長でもあります、植田和弘京都大学大学院経済学研究科教授から、本年3月に取りまとめられました屋島会議の中間報告につきまして、市民の皆様に御説明いただくことといたしております。その後、パネルディスカッションでは、植田会長をコーディネーターといたしまして、文化財・芸術・観光等の各分野を代表していただきまして、まず、瀬戸内国際芸術祭の総合ディレクターであります北川フラム様、人間文化研究機構 機構長であります金田章裕様、高松大学・高松短期大学の学長であります佃 昌道様、旅行ジャーナリストの村田和子様の方々の4人のパネリストの方々から、「世界に誇れる屋島を目指して」をテーマといたしまして御討議をいただくことといたしております。パネリストの皆様の貴重な御意見や活発な議論を通して、この屋島の持つ価値・魅力を再認識していただくとともに、本市が年内にも予定しております屋島活性化基本構想の策定や今後の屋島の活性化の推進に向けた道筋が示されるものになるのではないかと、大いに期待しているところでございます。



最後になりましたが、本日のシンポジウムのために御多忙の中、遠路、高松までお越しいただきました県外のパネリストの皆様に対しまして、厚く御礼申しあげますとともに、御来場の皆様の御健勝、御多幸を祈念申しあげまして、私の開会の御挨拶とさせていただきます。

本日は、どうぞよろしく願いいたします。

【高松市議会議長 大浦澄子】

皆様、こんにちは。ただ今、御紹介いただきました高松市議会議長の大浦澄子でございます。梅雨の晴れ間の本日、「屋島活性化シンポジウム」がこのような大勢の皆様方の御参加の下、盛大に開催されますこと、高い席からではございますが、心からお慶びを申しあげます。



御承知のとおり、屋島は、現在放送中の大河ドラマ「平清盛」にも取りあげられておりますように、源平合戦古戦場として知られておりますほか、昭和9年には、我が国最初の国立公園として指定され、瀬戸内海国立公園内で中心的な景勝地として、ピーク時の昭和47年には246万人もの観光客が訪れております。その後、下降線をたどっていた観光客も昭和63年の瀬戸大橋が開通し、一時は輝きを取り戻したものの、瀬戸大橋ブームの終了とともに、修学旅行客の撤退や観光ニーズの多様化、近年の景気低迷のあおりなども受けまして、現在は残念ながら60万人前後まで落ち込むなど屋島の観光は非常に厳しく、屋島の活性化は、本市にとりまして喫緊の課題となっております。

こうした現状を踏まえまして、本市では、各分野の専門家に市民の代表の方を加え「屋島会議」を設置し、屋島の保存・整備や活性化について検討すると共に、屋島全体の総合的かつ長期的なビジョンとして屋島活性化基本構想（仮称）の策定を進め、この度、中間報告が取りまとめられたところでございます。

そのような中、市民の皆様にご参加をいただきまして、このシンポジウムを通じて、自然・歴史・文化等、この複合的な価値を持つ史跡天然記念物、屋島の保存・活用、屋島全体の活性化について多くの方々に関心を持っていただきますことは、大変喜ばしく意義深いことでございます。

本日は、屋島会議の会長でもあります京都大学大学院教授の植田先生から、「屋島活性化基本構想（仮称）中間報告について」というテーマで御講演をいただき、その後、各分野で御活躍されております方々によるパネルディスカッションでは、それぞれ異なる視点から貴重な御意見が伺いできるものと、大いに期待をいたしているところでございます。

最後になりましたが、本シンポジウムが実り大きい意義深いシンポジウムとなりますよう、心から御祈念申しあげますとともに、御参会皆様の御健勝、御多幸、更なる御活躍を心からお祈り申しあげまして、議長としての御挨拶とさせていただきます。

本日は、本当におめでとうございました。

● 基調講演

テーマ 「屋島活性化基本構想（仮称）中間報告について」
屋島会議会長 京都大学大学院経済学研究科教授 植田和弘

【屋島会議会長 植田和弘】

私は、先ほど高松市の出身と御紹介いただいたのですが、生まれた時は、今の高松市に合併する前の木田郡東植田村でして、そこで生まれました。確か、小学校の1年が終わった時に、高松市内に転校しまして、高校を卒業するまでずっと、亀岡町、最初、宮脇町と言っていたと思うのですが、町名変更で亀岡町となりまして、そこで18歳まで住んでおりました。その後は京都の方に行きましたが、こういうことでの御縁がありまして、今回、「屋島会議」の会長を引き受けるということになったものでございます。



私自身も記憶がございましたが、小学校の時の最後の遠足は栗林公園だったように思います。友達とは、屋島でよく遊んだ記憶があります。最近は遠足にも来られないということで残念に思っております。

今日は、私の役割は、屋島活性化基本構想の中間報告をさせていただくということですが、あくまでも中間報告でございまして、これから議論を深めていくということです。また、この後、パネルディスカッションということで、この基本構想を作る屋島会議のメンバーではない方々においでいただいて、屋島活性化をどのように進めていけばいいかということ議論できるということ、大変いい事だと思っております。と申しますのは、こういう問題は、常に内部の目と外部の目と、できたら世界の目も入れていただいて、いろいろ議論するということがとても大事だと思いますし、そうすることによって、新たな価値の発見とか、あるいは新たな方向性、アイデアも出てくるという気がします。ということなので、今回、こういう機会が持てて大変良いと思うのですが、今後もそういう観点で広く議論をしながら、屋島の活性化について考えていきたいと思っております。

私の基調講演、お手元に、中間報告の概要をパワーポイントにしたものがあるかと思いますが、それに沿いながらお話をさせていただきたいと思っております。

これは市長の御挨拶の中にもございましたけれども、私も屋島はとても素晴らしいところと思うのです。瀬戸内海全体を「東洋のエーゲ海」って言いますが、しかし、私もエーゲ海へ行って見ましたけれども、瀬戸内海の方が美しい、本当のところそう思います。固有の多島美の美しさが素晴らしい。これは持って生まれたと言うか、自然が作ってくれたものです。大変素晴らしいものを持っているというふうに思うのですが、かつ、先ほどの御挨拶でもお話がありましたとおり、歴史的、文化的と言いますか、そういう意味でのストックになっているものです。そのストックになっているというのは物もあるんですけども、出来事があったということもストックなんですね。

これは、小学生の教科書を調べましたら、1185年の屋島の戦いが出ています。源平合戦の古戦場として出ている。それがあったということ自身、この屋島の持つ意味がそこにあ

るわけです。そういう史跡であったり、記念物であったりというふうに書きますと、物だけのようと思われるかもしれませんが、物もとても大事ですけれども、その物の体現されている物語と一緒にあるわけです。美しい多島美、瀬戸内海国立公園とあわせて、国の史跡や天然記念物に、昭和9年に、もう既に指定されている。だから、かなり早い時期から屋島の素晴らしさというのは認められていたというふうに言っていると思います。

それは、246万人という一番多い時の観光客数でございますが、昭和47年には、非常にたくさんの方が、これを365日で割ると1日当たり1万人にはならないんだけど、8,000人という方が毎日来ていたということになるわけですが、すごい数だったと思います、本当に。現在でも60万人というのは、決して少ないわけではないと思いますけれども、確かに246万人の時と比べますとかなり少なくなっています。後で、なぜこういうことになるかというふうなことから議論になるかと思いますが、旅行や観光の在り方の変化のようなことも背景にあるわけです。その辺りの分析についてもパネリストの皆さんにお話していただきたいと思っています。これだけ素晴らしい屋島なのに、来ていただく方が減っているということは、残念なことであります。かつ、地域の活性化という観点からすると、ここは何とかもう少し増やすことができないかなあということ、誰しも思うところでありまして、そういう観点で、改めて、どうやれば屋島の価値を保存しながら、再整備、活性化に結び付けていくかということ、この屋島会議では議論してきたということでもあります。

屋島の保存と効果的な活用ということは、文化財の保護という点でもとても大事でありますし、この文化財を活用して観光振興と結び付けることは世界的にも活発に行われています。私、実は、経済学を専攻している者なんですが、文化経済学という領域が、大変、大きな領域になって来ておりまして、ついこの間、6月の24日前後ですね、4日間ぐらいにわたりまして京都の同志社大学で、国際文化経済学会が開かれています。現在、文化に基づくまちづくりは、大きな一つの潮流になっていると言っていると思います。それはカルチュラル・ヘリテージ(cultural heritage)と言いますか、そういう歴史的・文化的なストック、よく宝探しと言うんですけども、実際に、地域にどういうストックがあるか、屋島の場合は、かなり歴史的にもよく分かってる場合もあるんですが、分かっていない場合は実際に探してみる。それから、そこにいる人もそういうストックになる。芸術文化的な才能を持った人がいて、そういう人を訪ねてくるという、そういうこともあるんです。そういう文化財や人を、意外と内部の人が評価していなかったりするのです。それで外から来て見てみると、とっても素晴らしいというような、そういうようなことが見つかる場合もございます。逆もあります。内部の人はとっても良いと言っているけれども、外から見てみるとそれほどでもないということもある。それで、私は内部の目と外部の目、両方の目があるということはとっても大事だし、それが交流するということがとても大事な意味を持っているというふうに思うのです。屋島についてもどうでしょうか。後で屋島の特性や価値ということについて改めて考えてみたいと思うのですけれども、価値の発見、再発見と言いますか、そういうことが求められていると思います。

文化財や自然や文化や様々な歴史的な出来事、そういうものが全体として、屋島なんですね。ですから、個々の文化財や自然だけではなくて屋島全体をどうやって総合的かつ長期的な活性化のビジョンとして策定していくかということが、基本構想策定の大きな目的であります。もちろん、屋島の活性化ということですので、何らかの意味での対象の範囲を明確にしておく必要があります。通常、屋島と言われている地域を念頭に置いているわけですが、しかし、

屋島の周辺の、例えば、海域なども含めて屋島と考える。あるいは、そういう別の様々な施設というのもあるわけですが、魅力ある施設ですね、そういうものとも連携して屋島活性化を考えるというようなことが当然必要でしょう。そういう意味で屋島単独だけでなく、屋島周辺域も含めて活性化を考えるという、そういう発想に立って考えてみましょうということでもあります。

それでは、屋島にはどういう特性や価値があるのかということですが、これは皆さんの方がよく御存じでありますし、かつ、これからますます磨きをかけていきたいというふうに思っているものですが、よく言われていることの一つは、貴重な自然環境、特に素晴らしい眺望があるということで、シンボリックなランドマークとしての役割があると思いますし、この多島海の、本当に素晴らしい景観だと思いますけれども、一度眺めてみると、この素晴らしさがよく分かるわけです。同時に、この地形自体が学術上も大変貴重な価値がある。こういうことは、多分、知ってる人は知ってるというか、そういうものだと思うのですが、意外と知らない人もいます。その価値ということについては、自然が持っているものですので、一種の固有価値というふうに言えないことはない。イントリンシック・バリュー (intrinsic value) と言うのですが、自然がそもそも持っている価値というものがあるということです。しかし、その価値を認識するプロセスがとても重要だということだと思います。

「生活・生産と歴史・文化・信仰」となってきましたと、なおさら、自然の持っている屋島というものと人間が関わりを持って、これまで生活や生産の場として屋島を活用してきたわけですが、それが歴史的に蓄積しているわけですね。それが素晴らしい歴史的・文化的、ストック資源として残されているということだと思います。

ここには四国霊場八十八箇所の第84番札所の屋島寺ということがございまして、これは60万人の中のかなりの数は、この屋島寺を訪れる人、10万人以上だと思いますけれども、こういう信仰の地として、屋島寺が非常に大きな意味を持っているということだと思います。



屋嶋城の城門跡というのも大変貴重なものでありますし、それから、四国村、四国民家博物館というのも、貴重なものかというふうに思います。こういうものは、先ほどお話ししましたが1185年には屋島の戦いがあったということでございまして、これを再現してみるという、そのまま再現するのは難しいでしょうけれども、振り返ってみるというのも、大変意味のある、この屋島という場所の持つてくる意味を物語として再度理解すると、こういうところがあると思います。

屋島は、そういう自然という面からも、それから歴史や文化という面からも、まさに多面的な価値を持っているということが言えると思いますし、それらは複雑に絡み合って複合的価値というふうに中間報告では書いているんですけども、複合的な価値になっているというところがあるかと思いません。

大変素晴らしい価値を持った所なんですけれども、残念ながらその価値が十分生かされきっていないということがあるということで、基本方針ではその屋島の活性化の方向性について、屋島の持っている特性や価値を踏まえて、良い循環を生み出して、持続性のある活性化を目指

して行きたいということでもあります。既に瀬戸内海国立公園にもなっていますし、史跡天然記念物でもある。自然環境、眺望としても大変素晴らしいし、歴史・文化・信仰の場でもあったり、生活・生産の場として残されているものも大変素晴らしいものがある。こういうことですが、残念ながら、会議の場でもよく議論になったのですが、最近が高松市内の学校も屋島へ遠足に行くということがほとんどないようでありまして、子どもたちが屋島に触れる機会というものが非常に減っているということでもあります。価値というものは、触れて初めて分かるというところが実際あると思います。ですから、そういう触れる機会を作るということも大事ですし、先ほど申しあげたような、歴史上の出来事があったとか、それが、この場でこういうふうに行われたとか、その跡がこういう形であるとかいうような話は、勉強したり、調べるとい、中間報告では、学ぶ、調べるといふふうには書いてあるのですがけれども、価値の認識というものは、学ぶ、調べるといふ能動的な取組をして初めて理解できる面があると思います。つまり価値はあるものではなくて、学んだり、調べたりして初めて認識出来るもの、そういう面を持っていると思います。

そういう点で「屋島は良い所だ」、「素晴らしい所だ」、あるいは、「みんなに来てもらいたいと思う」とか、そういうふうになるためには、屋島の良さをよく理解することが必要なのです。そのためには、そういう学んだり、調べたりする機会を作る必要があります。会議の場では義務付けたらどうだと、遠足の機会を作るといふことを強制的に進めてみるのも良いかもしれないという御意見も出たぐらいです。確かに、その学ぶ、調べる機会を意識的に作るということが大事かと思えます。そうすると、ひょっとしたら、私たちがよく知っていると思っていた屋島の特性や価値というものについても、再発見もあるかもしれないし、新発見もことによればあるかもしれません。そういう場をどのように利用するかとなると、その利用の仕方はですね、いろいろ考えられるわけでありまして、そこには、屋島という場と何かをするということが、うまくミックスして、結合が出来たら新しい価値の創造になるというような可能性も有り得ると思います。そういうことを、是非、作り上げるような場づくりというものが大変大事かと思えます。

そういうプロセスを経ることで初めて、屋島に愛着を感じるということになってくるということだと思います。やはりそういう体験を通じ、あるいは価値の発見、再発見、創造を通じて、屋島の持っているものを改めて再認識したり、作り上げる、そういうことを通じて愛着が増していくわけでありまして、まさに、世界に誇れる高松のシンボルであるという実感を自分が持てるということなのです。そうやって初めて誰かにも来てもらいたい、あるいはこんなに良い所だと発信しようと、そういう気持ちにもなってくるということかと思えます。学ぶ、調べるから始めるということなんです、ある程度自分が持っているだろう、既に持っていた知識に屋島に対するイメージというのがより深まったり、新たなものが付け加えられたり、創造されたり、そういうことをして、愛着が増し、発信、それが新たな交流を生み出すという、これは繰り返して行くプロセスかもしれません。

つまり最初に申しあげたように、高松の内部の人たちだけじゃなくて、もっと日本全体、あるいは、ことによれば世界の人々に、この屋島の持っている価値を認識してもらい、その人たちが訪れてくれることになりましたら、また違うように思うかもしれません。その人たちが見た屋島は、私たちが見ている屋島と違った感覚を持つかもしれない。その交流が、また新たな価値の発見や再発見につながるというような、そういう好循環が生み出されないかということ

を期待して、活性化の方向性という形で示させていただいた。あくまでも中間的なものですが、そういうふう考えた次第です。

最後に、「基本方針」、6つ横に並べて書いてあるわけですが、実際に具体的な活性化のことを考えようと思えば、一つ一つ解決しないといけないような個別的な課題もございませぬ。どんなところでもそうですけれども、ある場を活性化するということは、土地の利用の仕方をどういうふうにしていくかということが大事になってくると思ひます。廃屋なんかを撤去した後、更地になった所を、どういうふう利用するかとか、そういうことがとても大事でありますし、水族館もやや老朽化していると、こういうことがあるわけですからそれをどうしていくのか。多くの人々が会議の場でも発言されたのはアクセスの問題です。そういうのも大事な問題になっていくでしょう。それからやはり多くの方が気にされておられるのはケーブル跡の問題とか、こういう個別的な課題がございませぬ。それらの個別の課題は個別にきっちり考える必要がありますが、同時にそれは屋島全体の方向性の問題と非常に深く結び付いていて、このように思ひます。ですので、屋島全体をどういう価値あるものとして我々が考え、あるいは活性化の方向を考えるかというときに、基本方針に書いてある6つのことは外せないことかなと思ひた次第です。

1つ目はやはり貴重な自然環境、文化財こういうものの持つてゐるもの、どんなに素晴らしいものであるか、これは裏付けも必要です。人々が素晴らしいなと思ふということもとても大事なことなわけですが、継続的で体系的な調査研究で、どれほどの価値があるものかということ調べておくということとはとても大事なことでありますし、そういう根拠に基づくということは、我々が持つてゐる価値を学ぶというときに不可欠の要素です。そういう意味で、自然環境、文化財の継続的、体系的な調査研究を行うと同時にその保全ということも、システムとして作っておくこと、これはとても大切なことだと思ひます。

それから、屋島の持つてゐる歴史・文化・信仰、屋島は舞台になっていたわけですが、そういうものが蓄積した場ということもございませぬ。そういう屋島であるということも再発見し、活用するということですが、私は、物語が重要なことと思ふのです。屋島はどのような所ですかということも、歴史や文化や信仰と関わらせて、屋島を良いと思ひた人たちがそれを誰か相手の人にしゃべれないといけません。屋島に来てほしいと思ひた人にそういうことをしゃべれるというような意味での屋島の持つてゐるものを改めて整理するという必要だと思ひた次第です。

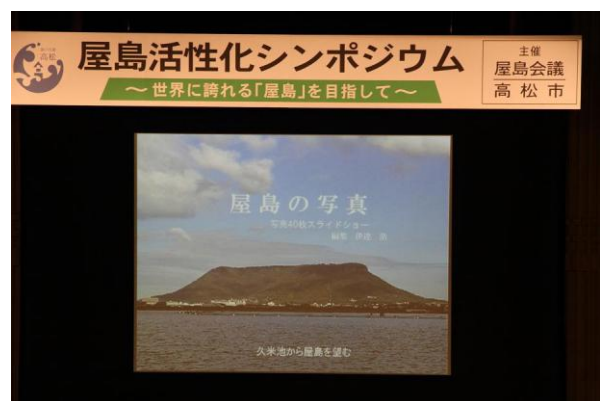
そのことと大変結び付いてゐるわけですが、最近の観光は単に見るということだけではなく、いろいろな意味で、知的欲求を満たすというふう書いてあるわけですが、そういう文化観光的な側面を持つてきてゐることは確かでございます。そういう意味で、歴史や文化や信仰と結び付いて、どのような屋島であったのかと、あるいは、それはどのような歴史的意味を持つたり、文化的意義を持つたものなのかということも勉強できるということが一緒になったような観光になる、そういうスタイルが創造できたらいいなと思ひます。

それから、もちろん、この屋島は、高松のまちづくりと連動もする必要もございませぬし、景観の保全と再生ということも大事な問題ですし、次世代への継承という視点もなければなりません。ただ、これらのことを進めていくということについて、多くの人に人に来ていただくということですから、魅力を感じるということが全体として必要でありますけれども、魅力があるということを説明する人が必要です。多くの観光地がそうなのですから、説明されて、つま

り自分が、情報を知識として自分のものにできた時に、いろいろ見てまわったことと、その知識とが一体となって屋島の記憶が残ると、そういうものじゃないかなと思いますので、やはり受け入れる側の人びとが、やはり自分自身が素晴らしいと思い、そのことを説明できるというような状況、かつ、それが来た人にも分かりやすくて親切な仕組みになっているというようなことも大変大事なことじゃないかなと思う次第です。そういう意味で実効性のある受入れ体制ということも必要でありますので、そういうことを作り上げることも含めて全体としての実効性のある推進体制を整備・構築していくということが大きな課題になっていると思っている次第です。

以上、これらはあくまでも、中間的な報告でありますので、これから多くの方々の御意見や、また、屋島会議としても議論を深めて、より実効性のある基本構想を策定していきたいと、こういうふうに考えている次第です。簡単ではございますが、私の基調講演としての報告とさせていただきます。

どうもありがとうございました。



●パネルディスカッション

テーマ「世界に誇れる「屋島」を目指して」

コーディネーター 植田和弘(屋島会議会長 京都大学大学院経済学研究科教授)

パネリスト 北川フラム(瀬戸内国際芸術祭総合ディレクター)

金田章裕(人間文化研究機構長)

佃 昌道(高松大学・高松短期大学学長)

村田和子(旅行ジャーナリスト)

【コーディネーター 植田和弘】

それでは、ただ今からパネルディスカッションを始めたいと思います。パネルディスカッションの目的は、屋島活性化に向けて、世界に誇れる屋島を目指してどういうことをしていけばいいか、ということについて、いろいろアイデアを出す、あるいはいろいろ議論をするということですが、何か一つまとまった結論が出るということではなくても、何かヒントでも得られたら、我々としては大変有り難いと思います。



出来ましたら最後に会場の皆さんからも、いろいろ議論を聞かれての御意見とかをいただきたいと考えておりますので、是非よろしくお願ひしたいと思います。

最初に、4人の皆様の御紹介があったわけですが、何らかの意味での屋島との関わりがあるかと思ひますので、自己紹介を兼ねて最初にお願ひしたいと、こういうふうに思っている次第です。その上で、また、それぞれの御専門と言ひますか、それぞれの分野をお持ちでございますので、その観点から見た屋島の現状とか課題ですね、そういうことについても少し述べていただいて、その上で屋島の活性化に向けて求められているものをより明確にしていきたいと、そんな段取りで進めさせていただきます。

それでは最初に自己紹介を兼ねていただいて、これまでの屋島との関わりということ、屋島の印象などもあるかと思ひますので、少しお話しただければと思ひます。では、こちらの北川フラムさんの方から最初にお願ひできますでしょうか。

【パネリスト 北川フラム】

2010年に瀬戸内国際芸術祭がありまして、この中に7つの島および高松という形で会場が指定されたんですね。で、屋島がないぞと思ひたのですが、高松市の中に入っているということで、屋島そのものをクローズアップするということはできませんでした。来年、瀬戸内国際芸術祭の2回目が行われるということで、大西市長の強い気持ちがあつて、屋島をとにかく頑張つてやろうというふうに思っている。そういうところです。

それで、屋島は、車でぐるぐるまわると、海を見るのもいいし、非常に気持ちがいいですね。それが一つ大きな特徴、つまり、屋島の上からものを見るというのがある一つあります。それと、屋島をいろんな角度から見るといいなというのがありますが、どうしても屋島に渡るという気分がなく、これは個人的な話ですが、僕が小学校の時に、週刊朝日でクロスワード



パズルって大人気のコーナーがありまして、うちの父は、これで賞金を当てようと思って頑張ったんですが、最後に屋島に渡るって書いて落ちこちたんですね。知らない人にとっては、屋島は渡るもんだと思っているのに、地元では登ると言う。それがあって屋島っていうのは極めて深い思い入れがあります。ただ、屋島に渡るという感じがないというのが弱点で、これをどうするかというのが一つ大きな課題としてあります。

で、瀬戸内国際芸術祭の来年では幾つかやるんですが、まず、山上駅、ケーブルの山上駅ですね、あれが廃墟になっているんですが、実に魅力的な建物で、これは、かなりすごいアーティストが関わって面白い仕掛けを作ろうと。中には入れませんから、それをどうやるかというのが一つ課題ですね。派生して、ケーブルの下の駅の辺りも非常にいいたたずまいがあるので頑張れたらいいと思ってます。そうなんです、これでは、ぱっとしないということで、不思議なイベントをやろうと。やるんだしたら、やっぱり日本を代表するイベントになる可能性があるとか、そういう構想で立てたいというふうに思いまして、今年プレオープン、来年の芸術祭のプレイベントとして、芸術祭の華にしよう。地域の屋島の人たちおよび牟礼・庵治の人たち、あるいは香川県の人たちが参加できる楽しい大イベントをやろうということで、「現代源平屋島合戦絵巻」、とりあえず仮称ですが、実際このような名前になると思いますが、これをやることにしました。

これは、今、準備をしまして、地元の町内会の方、あるいは、いろんな学校とかに少しずつまわり始めているということで、参加者が、恐らく今年で5,000人以上、来年、恐らく数万人になるだろうというふうに考えているんですね。こういうことです。これが、今回の舞台になる立石港の所ですね。これは、まず場所の中心があそこの浮島と言うか、まさに源平合戦の戦いがあった場所ですが、まず、両岸から見て楽しいというのを一つの大きな目安で考える。テーマは旗なんですね。それをうまく使って源平の旗が陸上をスピードがあるグループ、あるいはゆっくりのグループ、あるいは海から来るグループたちが動いている。紅白の旗がたなびいて見えていく。これを屋島と五剣山両方の山側から見るとというのがあります。

まず、そのほかに2つの楽しみがあって、第1部は行軍ですね。こういうふうな感じですが、源平のグループが恐らく、5グループずつ、あるいは10グループずつ、これが移動していく。あるいは陣地がある。この紅白の旗が実際このぐらいです、山の上から見ると。こんな感じで見えていくというふうに考えています。ただ、行軍と言っても、これがちょっとなかなかおもしろい。

旗の意匠は、瀬戸芸の旗のデザインをしている世界的な大デザイナーですね。原 研哉さんがやってくれるということです。これが紅白の旗に小さく入るシンボルマークですね。平家がエビ、源氏がタコということで、これもくっつけようというふうな感じでこれが動く。これが実際に例えば、こういう使い方がされるだろうというふうに思っているわけですね。いろんな旗の種類があるんですが、右側の二本が白いのはなぜかって言うと、参加者が自分で絵を書けるということで、まず、いろんな形で参加できるということで考えてます。だから家族単位とか、グループ単位で絵を書けます。だけれども全体の動きとしては紅白で見えると。既に工

芸高校で原先生にワークショップをしていただいて、工芸高校の学生たちがやっている。それが例えばこんな形で出てくる。こういうのがいろいろ出てくるわけですね。これは、だから皆さんが工夫を凝らして、ただ紅白はほぼ同じ数にそろえたいんで赤だけ増えるとちょっと困るんですが、これを上手くやっていただいて、自分の家あるいは自分の旗を作ってもらいたいというふうに思っています。何でもいいんですが、できるだけ上手に書いてほしい。

音楽の監督が、鬼太鼓座の代表の松田惺山さんがやりまして、この音楽はそれぞれの場所で太鼓、県内ほとんどの太鼓が集まると思いますが、やがて県外からも、日本のいろんな太鼓大会が毎年行われるようなところまで持っていきたいと思っておりますが、太鼓が固定した陣地で動いている。ここで重要なのが後で出てくると思いますが、それぞれのグループが旗を立てて、音楽、鼓笛隊とか管打団とか音楽を中心にして、それぞれ衣装をいろいろ作って参加すると、パレードとして面白いものを考えているんですね。

2部がいわゆる合戦で一種の運動会のようなことをやろうということで、騎馬戦とか棒倒しとかいろいろありますが、そういったもので紅白の戦いをやる。けれどもここで重要なのは、皆さんに参加してほしいということで、応援合戦あるいはいろいろな食べ物そういった五感を通してのいろんな参加の仕方でもらおうと、あるいは口上合戦などそういった形で、これは言ってみれば、屋外コンサート、あるいはファッションショーが行われるというふうに思ってください。

最終的には、みんなで最後は踊りをやります。この踊りを指揮しているのが、コンドルズ、朝ドラの「てっぺんダンス」を皆さん御存じだと思いますが、そのコンドルズが指導するという形で、だから、踊り・音楽・旗というものを持って皆さんが参加する。

最後には、那須与一、これをどういうふうにするかというのはこれから考えて、後のお楽しみですが、そういった参加度が一番高い



イベントをやろうということで、老若男女がいろんな形で関わるということを考えているわけです。これを11月4日にやります。ここでの狙いというのが、とにかく屋島っていうのを若い人たちを含めて皆さんに知っていただく。屋島を歩いていただく。いろんなグループが出発する所が屋島のいろんな歴史的な源平の名所である、そういうことを含めて歴史的な記憶をよみがえらすんですが、皆さんがこの場所全体を通して楽しむというふうなことをやろうと、そういう形で関わっていくということです。以上。

【コーディネーター 植田和弘】

ありがとうございました。大変楽しそうで、五感を通じた参加が皆さんの求められるというか、楽しい感じで参加するという、そういうことだと思いますが、アートとか音楽とか踊りとか、そういうことを通じた歴史的記憶の再現という、そこから屋島の価値を理解していただくということにつながるのかなあと思いました。

では、金田章裕先生、お願いできますでしょうか。

【パネリスト 金田章裕】

私は、京都大学大学院に入り、修士論文を書いているときに、調査対象として香川県に参りました。それが1970年ごろですから、大分、前の話ですが、善通寺とか曼荼羅寺の辺りの平安時代から鎌倉時代の荘園について調べました。修士論文は無事出したんですが、その後、私にとっては、それがきっかけということですが、別途に始まりました香川県史の執筆をするようにと頼まれまして、1970年代の終わりぐらいからでしょうかね、三、四年、毎年のように調査に参りまして、香川県史の古代の農村とか土地計画とかという辺りを私が執筆いたしました。それが終わるか終らないころに、高松市が文化庁の補助事業で弘福寺領讃岐国山田郡田図という重要文化財の多和文庫に所蔵されている、日本では一番古い年紀を持った、天平7年の年紀を持った地図があるんですが、その地図の場所の調査をするということになりまして、そのために前後2回に分けて調査をしましたので、十三、四年間、毎年のように高松市に通いました。



そのようなところが直接のきっかけですけど、その間、今では動かぬ形で、今朝も見てまいりましたが、確認されておりますけども、古代の屋嶋城の遺跡がどっかにないのかということで、屋島の中をうろうろと歩き回りましたし、いろんなことをしました。その時は見つからなかったですけども、現在ではそれが新たに遺跡として加わっているというようなことでございます。そんなような形で香川県のいろんな史跡に関わってきたというようなことでございます。

【コーディネーター 植田和弘】

ありがとうございました。多分もっとも古い時代から関わりをお持ちということでございますので、後でまたそういう観点から屋島の活性化に向けてお話いただければと思います。

それでは、佃 昌道先生、お願いできますでしょうか。

【パネリスト 佃 昌道】

高松大学の佃でございます。私がここに呼ばれたのは、多分地元を代表して何か言えということで呼ばれたんだろうなと思っております。

それで屋島とは、やっぱり小さなころから登って、御来光を見たりとか、あるいは、いろんな形で水族館に行ったりとか、いろんな思い出がある所でございます。特に、北嶺という所がございまして、ちょっと、この会場の方で3年以内に北嶺の所を歩いた方どのぐらいおられますか。

プロが来てますね。今日は。

私が一番好きなのは、やっぱり北嶺の一番北の所から見る瀬戸内海の風景。これは、瀬戸内海が国立公園として一番最初に指定されたところではありますけど、四国側の一番素晴



らしいところではないかと思っっているぐらい、大好きな風景でございます。今日も行ってきましたけど残念でした。雲が出てまして、霧が出てまして、全く見えませんでした。私の脳裏にはいつものような島々が浮かんでいるというような状況で、私は大変屋島が好きです。

なぜ好きかというのは、一つは海から約300m上がったところにあるということは、大変眺望が良いということです。屋島に登ると、一つは西側を見ると、高松の開発が、どんどん変わっていることが見える。それから東側を見ると、古戦場の源平の戦いを思い出すような所がある。そして、瀬戸内海国立公園で北を見ると、3方向の風景が全く違うような形で、我々の、私の心をすごく変えてくれるような、すごく癒しの場所でもございます。その屋島がですね、一番嬉しいのは、屋嶋城が見つかったということで、ちょっと人が少なくなっていたのが、これからまた増えてくれたらいいなと、地元で屋島をたくさん愛してくれる人がきたらなあと思っってます。以上です。

【コーディネーター 植田和弘】

ありがとうございました。屋島は、確かにどこから見るかによって見え方がかなり違うし、逆に言えば、屋島からどっちを見るかでまた違うと、そういうことでございました。

それでは、最後に、村田和子さんの方からお願いできますでしょうか。

【パネリスト 村田和子】

皆様こんにちは。旅行ジャーナリストの村田和子です。私は、「旅を通して、人、地域、社会が元気になる」というのをモットーに、様々な媒体で情報提供しております。今日は、恐らく旅の専門家ということで呼ばれてはいるのですが、旅行者を代表して皆さんに屋島に対してお話をさせていただければと思っっています。

私と屋島の関係と言うか香川との関係は、実は生まれ育ちは全然別の所です。ただ、日本をいろいろまわってますけれども、私は一番瀬戸内海の景色が好きなんですね。いつか住みたいなと思っっていて、皆さんが羨ましいと思っっております。そんなこともあり、香川県にはかなり訪れてはいるんですけども、実は、屋島は私にとって景色の一部、見るものであって、登る所という認識が今回お話を頂くまで、恥ずかしながらありませんでした。では、いつ登ったんだと記憶を探っても無い。家に帰って両親に聞きましたら、昭和50年ごろに行っていると言われたんですけど、それではこの場でお話できません。ですので、先月、1泊2日、高松駅から、ことடன்に乗って、シャトルバスで山上までというのを、2日間にかけて2往復、本当に一般の旅行者ということで訪れてきました。

ちょうどボランティアガイドさんがいらっしやいまして、1日は案内していただけたんですね。そういった中で非常に、屋島は魅力的なところがたくさんあるなあという認識をしたのですが、ただもう一方で、観光客が訪れて屋島を存分に楽しめるかということ、ちょっと課題かなと思うところも見えてきました。今日はそういったところを中心にお話できればと思っっております。



どうぞよろしく申し上げます。

【コーディネーター 植田和弘】

ありがとうございました。

今それぞれのパネリストの皆さんから屋島との関わりを説明いただいて、自己紹介をしていただきました。それぞれの御専門がございまして、今度はそのそれぞれの切り口から見た屋島の現状と課題ということで、少しお話をいただきたいと思います。屋島の活性化を考える場合には、それぞれの分野ごとで一度分析をしてみて、どういう現状があり、どういう課題があるかということ、やはり整理する必要があるかだと思います。それぞれ4人の方々、それぞれの分野で御活躍されていて、いろんなところも見ておられると思いますので、そういうことも含めましてお願いしたいと思います。

今度は最初に、村田さんの方から、旅行ジャーナリストの観点から、少し屋島を分析していただくということでお願いいたします。

【パネリスト 村田和子】

お手元にも資料があると思いますが、パワーポイントを作ってまいりましたのでこちらで進めさせていただきます。

この表紙にあるのは、この間の6月に行って、自分で写真を撮ってきたものです。イイダコを食べたりとか、いろいろ楽しんできた一部になるんですけど、訪れた感想、それからデータなんかも交えて、旅行者から屋島がどう見えるかを、まず、いきなり答えみたいになってしまいましたがお話ししたいと思います。

歴史の要所としては知名度が高く、知らない人がいないと言っていいぐらいだと思うんですけど、じゃあ、日本全国たくさんある旅先の中の一つとしての認知はどうかというと、残念ながら高くはないかなというのが現状だと思っています。今回、私が訪れる時に非常に気になったのが、情報が、屋島に関しての情報が非常に少ないことなんです。何があるか、どんなものがあるかというものはあるんですけど、屋島に訪れた人が、じゃ、そこをどういうふう楽しんでいるのか、そこで何を思ったかという、訪れた人の情報、口コミ情報が非常に旅行では重視されるようになっているのですが、それが無くて、行く前に滞在イメージがわかかなかったんですね。ただ、行ってみれば何とかかなかなと思って行ってみると、シャトルバスを降りてどっちに行けばいいか分からない。屋島寺はどっち？談古嶺はどっち？みたいな感じで、正直、楽しむ、旅行者がここへ行きたい、あるいは楽しめる環境の整備が遅れているかなという気がしました。

具体的には、散策マップなんかは、今、観光地では、結構用意してあるんですけど、屋島の場合、私が見た限りでは、降りた所にあった案内看板だけで、手持ちのものが無かったので、その辺も課題かなと思っております。

屋島から離れてしまうんですけど、今、旅行者を取り巻く環境を少しお話しておきたいと思います。旅は時間とお金を使います。でも触ることもできないし、後に残らないですよ。なので、旅を計画する人は失敗したくない、不安な気持ちが一杯で計画しています。だから、先ほど言ったような口コミ情報の同じ旅行者の情報をすごく重視しますし、今ですと、やはり国内旅行は、特にインターネットで情報を検索するような流れになっています。なので、ネット

上に情報があるというのは重要なことになってくるんですね。

では、情報がたくさんあれば良いかと言うと、今度は、ツイッターとかフェイスブックとか、皆さん名前は聞いたことはあると思うんですけど、スマートフォンとか。常に情報があふれている状態なので、実は、情報はあることが重要なんですけれども、第2段階として、素通りされない、自分にとって有益な情報だというふうに思ってもらって見せ方を工夫していくということが、今、非常に重要になってきています。そういったことを踏まえると、私は、屋島の課題というのは、魅力的なものがあるのに情報が上手く循環していないこと、屋島の現地とインターネットと双方での情報戦略っていうのを、もう少し強めていけば良いんじゃないかなと思っています。



データだけさらっと見ていきますけども、こちら、私も関わっている旅行のロコサイト「フォートラベル」というサイトになるんですけど、ここは旅行者が自ら旅行日記を掲載しているサイトになります。全体で国内外含め60万冊ありますが、そのうち半数が日本国内のもので、じゃあ、屋島はどれぐらいかというのを見ていきたいと思うんですが、香川県全体だと、これ7月初めのデータなんですけど、3, 111

冊、高松・栗林公園・屋島っていうエリアだと857冊、屋島と庵治で、これがエリアの最小単位になるんですけど、何冊あるかっていうと86冊なんです。参考までに、小豆島・直島・豊島は882冊ということで、実は、高松市内よりもたくさんこういう旅行記が挙がっている。旅行記というのは、書くのも非常に大変なので、実は旅行者は100%ではなくて120%満足して初めて良い情報を書く傾向にあるんですね。そういうことを踏まえると屋島に魅力がないのではなくて、残念ながら、訪れた人に屋島の魅力が十二分に伝わってないという可能性が、このデータから見えると思います。

屋島会議の報告書でも、私が気になった情報が2つあります。1点目は、瀬戸大橋開通などイベントがあったときに増える旅行者が、すぐに落ちてしまうこと。本来ならば、そこで継続するなり増えていくっていう傾向が求められると思うんですけども、リピーターが獲得できていない。もう一つ、市内の半数以上の人「ほとんどが屋島に訪れたことがない」というデータを見て、ちょっとなかなか、この状況では遠方から人を呼ぶというのは難しいかなと思いましたが、市民の方自体も、屋島の魅力とか楽しみ方というのがイメージできていないのかなというふうに思いました。

ということで、「現地とネット双方での情報戦略の強化が急務」だということを課題として挙げさせていただきます。チェックポイントは、一つ一つお話したいところなんですけど、時間が無いかなと思います。私が、この間訪れて気が付いた点をこちらにまとめています。廃屋の撤去等が済んでこれからというときだと思うので、是非こちらも参考に、今後、情報整備を進めていただければと思っています。以上です。

【コーディネーター 植田和弘】

ありがとうございました。大変貴重な意見だと思います。要するに、旅行記を書いてもらえ

るようにするにはどうするのかというような点が大変大事ということですね。

【パネリスト 村田和子】

そうですね。旅行記だけでなく、やはり個人の情報の伝達がものすごく力を発揮していますので、そこをうまくまわしていくというところで、もう少し頑張れるんじゃないかなと思っています。

【コーディネーター 植田和弘】

ありがとうございました。

それでは、佃先生お願いできますでしょうか。

【パネリスト 佃 昌道】

私も資料を用意しろということで、「屋島活性化シンポジウム 主な文化財分布図」というものがございます。その1枚なんですけど、私、地元の立場からということで、先ほど、屋島の満足度という話があったのですが、外国人が来た時にもものすごく満足度が高いんですよ。もう一回来てみたい所は屋島って言うんですね。見て分かりやすくて、例えば、町が見えるだとか、それから瀬戸内海の島が見えるだとか、すごくブラボーが多いんですね。そういうこともありますので、それは地元として言っておきたいなと思います。

一つはこの図のようにですね、大変いろいろな文化財の資源が多いですね。ただ、屋島っていうのは山になってますから、それがなかなか線で結びにくいところがあって、それが屋島の難しさなんだろうなと思っています。

例えば、ここで千間堂という所があるんですけど、皆さん御存じだろうと思うんですけど、もともと屋島寺の開祖は鑑真和上ですね。鑑真和上が浦生の港について、そこを上がって千間堂の所に寺を建てたというのが始まりなんですね。もちろん平家の戦いよりも前の話になるんですが。そこを行こうと思って、今、若干、道はあるんですが、なかなか行くことが出来ない。そういう意味でいろんな点があるんですけど、それを線として結び付けにくいという特徴があるので、それをどういうふうに結び付けていくのかなというのが大事な話なんかじゃないかなというふうに思ってます。

それで一番分かりやすいのがですね、今、屋島寺の所の隣に駐車場があるんですね。駐車場に行くと屋島寺に行きます。多分、その次は獅子の霊巖の所で瓦投げをする。この瓦投げ、何ですかといういわれが、なかなか書かれていないですよ。なかなか書いていないので、ガイドさんがいなければ分からないようなところ、ただ、瓦投げ、みんなやればいいんですが、やらない人もいますが、瓦投げをして、それで駐車場なんで帰ってしまうという方がたくさんいらっしゃるんじゃないかと思いますが、どうでしたか1回目行って。

【パネリスト 村田和子】

私も1日目はガイドさんがいらっしゃらなかったんですね。水族館の方からまわって行ったんですけども、ちょっとどっちに行っていけばいいかわからないというのがあって。やはり、屋島寺目当てで来られた方だと、行って帰る、それ以外は発見がなかなかできないという状態では？

【パネリスト 佃 昌道】

多分、他の観光客も同じような形でそこで終わってしまうと、ほとんど滞在時間30分から1時間なんですね。ここがすごい問題で、もっと滞在時間をおくことによって、お腹も減るから何か食べてみようかとか、このイイダコおでんっていうのが曲者で、外国人の方は、タコは大変苦手なので、外国人の食べるものが無いんですよ。やっぱりそういう意味では、もうちょっとお接待のところなので食べられる物を考えてあげるとか、あるいは、ちょっと疲れたらスイーツもあるんだろうとかという部分が無いので、滞在時間が短くてすぐに降りて、下のうどん屋さんで美味しいうどんを食べてしまうということで終わってしまうのかなと。

私、すごく屋島が好きで綺麗な所がいっぱいあるんですけど、なかなかそこにアクセスするだけの時間が大変です。先ほども北嶺行ったんですが、やっぱり北嶺をまわると、普通の人だと1時間はかかってしまうんですね。それも年寄りの方にはバリアフリーになってなくて、そのあたりではいけないのかな。ちょっと、電気自動車みたいなのがあったら、スーと行けたりする。昔は籠があったんですね。屋島の山上に行くに籠があって、籠に乗せてくれるというのがあったんですけど、今はそれも無くなってます。そういう意味で滞在時間を長くすることによって、屋島というのは変わって来る。その滞在時間を長くするためにどうするのかという工夫があまりされてないのかなと。

地元の方は、多分、屋島に登るっていう感じなんですね。実は、屋島というのは、相引川という川が、ザーと南の方にあって、あそこの川は渡って、島に行くようになっているんですけど、イメージとしては高いところに登ることになっていて、地元の方は登ることによって、健康などでうまく行っている部分があるんだと思うんですけども、観光客から言うとなかなか滞在時間が少ない。そこに何か持ってくるのかな、そのためのいろんな工夫というのがやっぱり屋島の一番の問題なのかな。

もう一つ屋島の良いところは、北嶺をゆっくり歩いてみると、いろんな鳥の声が聞こえたりだとか、いろんな植物が見れたりだとかするんですね。特に千間堂の辺りに行きますと、ちょうど散策することもできます。そういう意味では、自然の体験とか、あるいは雑踏から逃れての癒しのような活動が出来るところがいっぱいあるので、それを上手く使われると、それも今の現代的なニーズにこたえられるのかなというふうに思ったりしてて、やっぱりもう少しそういう意味で考えていくところは多々多いのではないかな。少なくとも2時間、3時間の滞在時間をすることによって、言い換えると、その時間を感じることによって、「屋島良かったな」というふうに思えるんだと思うんです。30分では屋島の良さは、多分、分からないので、皆さん方、ツイッターしてくれないんですねという感じです。

【コーディネーター 植田和弘】

ありがとうございました。屋島での滞在時間を長くすることにとっても重要なカギがあって、そのためにいろいろな工夫、随分たくさんを言っていただきましたが、食べ物のこともありますし、バリアフリーにすることもありますが、点のような文化財を線とか面にしていくというような工夫も必要だということで、貴重な分析をしていただいたと思います。

それでは、金田先生、お願いします。

【パネリスト 金田章裕】

先ほどから、いろんな方からお話が出ておりますが、屋島は史跡であり、天然記念物であるという形で、文化財になっているわけでございます。国指定の文化財というのは、御承知のように、無形文化財・有形文化財、有形文化財のところには、重要文化財という建造物も入りますが、それから、史跡・名勝・天然記念物があります。それから、相対的に新しいものでは、重要伝統的建造物群保存地区というのもありま



して、古い街並みなどの残っているようなものなどがこれに相当します。それから、一番新しい文化財としては重要文化的景観というのが設定されておりまして、これはまだ、実施されてから6年ぐらいの比較的新しいものですので、なかなか理解が行き届かないというところがあるんですけども、文化的景観というものは、その地域の自然環境とか立地条件とか、それぞれの時代の社会的、経済的条件などに規制はされるんですけども、そこにいる人々がそういった固有の要素と一緒に作り上げてきた生活の結果であるということですので、その文化的景観というのも、非常に重要な見方になると思います。

そのうちの少なくとも屋島は、史跡であり天然記念物でもあるという、大変贅沢な文化財の場所であります。しかも、その指定を受けた時には、まだ古代の7世紀末の山城の、屋嶋城の遺構も見つかっていなかった。今は見つかって、より見やすいように史跡としての復元整備が行われているということですので、非常に豊かな文化資源に恵まれているわけです。そういう所をいかに見ていただくかというのは、先ほどから、佃先生がおっしゃっているとおり、そこでの見学時間、滞在時間をどのように延ばしていただけるかというのがポイントだと思います。

特に1960年代の終わりぐらいから70年代にかけて、要するにバスで団体を組んでですね、ぐるっと1泊2日、あるいは2泊3日というのはめったにないのですが、そのくらいで観光地をまわって来るといったパターンの観光が相当一般化しました。今では、そういう観光パターンそのものが、むしろ少数派になっているわけです。ですから屋島の観光パターンは、かつてそういう形に対応したものとして作られてきてるのだと思いますけれども、実はそんな単純な一つの方向だけではなくて、非常に豊かな文化資源をですね、非常に豊かな角度から見ていただく、多様なメニューを準備しないとだめだと思います。

私、一度、世界遺産の関係でドイツのルール工業地帯にある産業遺跡を見てまわったときがあるんですが、そこで非常にびっくりしたことがありました。その産業遺跡群をネットワークで結んで見ていただけるようにしているんですが、そのときの基準が一つの産業遺跡を見学するのに3時間以上そこで見学して楽しめる場所というのをネットワークで結んでいるんです。価値じゃないんです、時間で区切っているというのが感心いたしました。そういう発想を日本では持ったことがなくて、ドイツで初めてそういうことに出くわしましてびっくりいたしました。

つまり、豊かな文化財がありますから、その文化財でも、例えば、古代の山城、屋嶋城に関する遺跡の見学のためのコースであるとか、あるいは天然記念物に関する見学であるとか、あるいはそこでの子どもたちの写生会であってもいいんですが、いろんな形のものがあるんです。それらを、やはり、目的別、それから時間別に、例えば、それを3時間で見学するコース、あ

るいはお昼も食べてピクニックのようにして訪れて5時間滞在するコースとかですね、様々なメニューを準備して、それを提供すると。それをいろんな形で楽しんでもらうというのが、恐らく最も重要なことだろうというふうに思います。ワンパターンで、団体でバスに乗って、ドンと来て、お土産買って帰るというパターンは恐らく終わったんだというふうに思います。

【コーディネーター 植田和弘】

ありがとうございました。御指摘いただいたように観光パターンが大きく変わってる中で、どれだけそれぞれの人のニーズにこたえられるようなメニューを用意できるかということが、大変大事なことだと思われた次第です。

それでは、北川さん、お願いできますか。

【パネリスト 北川フラム】

佃先生、金田先生の話、そのまま受けたお話をさせていただきますが、屋島寺からケーブル山上駅の間が結構いいんですが行かない。ケーブル山上駅は危ないので入れないので、ますます行かない。これをどうするかというのが課題なんですね。これはまだ言えませんが、恐らくうまくいくのは、ケーブル山上駅まで行ったら、とんでもない写真が撮れるという仕組みのアートを作ろうとしているんです。これが、そこに行って写真を撮るとめちゃめちゃ面白いぞというのをちょっと今考えていて、これはやりたい。それにしてもまだ遠いんですね。それをどうするかというと、今、その間に猪を取る檻が2つある。それで、これは何とか猪を時々入れたい。取れないと面白くない。とか含めて猪がダメなときは豚でも入れとかとか、例えばです。とにかく、行く間、何か、檻が2つあるんだから、今日は何が入っているかわからないぞというようなことでも良いかなと。猪とか、あまりサルは出ないと思いますが、でもそれがある。

あと、歩く道に少し変なことをやるんじゃないけど、ただ、石畳に何か、例えば、縁はあまりないが、西行を五色台から持って来て西行の詞とかを置いておくとか。そういうことで環境的に邪魔になってはいけない。けども、何か面白いぞということで、僕は、現実的にやっぱりそこに、ケーブル駅まで、5万人とか10万人とか、毎年多くの人が入っていくような形をつくらないといけないので、そういうことは考えてます。

もう一つあるのは、同じ高松市内にあるのですが、ここに水族館がある。いろんなことを考えて、大島に、うそっこのと言うか、天空の水族館を作ろうと思っている、アーティストが作る水族館。そうすると庵治・牟礼の人たちと大島との関係は非常に深いですし、大島から見上げる屋島というのもありますし、ある意味、高松の陸地から一番近い島ですよ。この中から水族館つながりの関係を作る。

先ほど、先生方が言われたのでいうと、やっぱり海とのつながりを強める。あちらから見る屋島を見たいということを含めて、そういうことを考えたいなというふうに思ってます。

とにかく面白いものを作らないと、若い人にとって、今、屋島っていうのは魅力がないということは確かですから、これを何とか話題にして、やっぱりソーシャルメディアでいくと、二、三十代の女性がとにかく動かないと口コミが広がらないんですね。これをとにかくやれるような仕組みをしたい。当然だけど、お年寄りの人たちが行って楽しいということがすごく重要なわけですから、これを現実的に来年までにやらないといけないということで考えている最中

です。

【コーディネーター 植田和弘】

ありがとうございました。

4人のパネリストの皆さん、それぞれの切り口がとても新鮮で、屋島会議の今後の議論にも非常に参考になるお話をいただいたと思います。村田さんからは、情報戦略の強化ということで、これまで欠けていたことかもしれないと思ったのですが、情報戦略が行われるためには、それを強化するためにも、佃先生がおっしゃっていただいたように、滞在時間を長くするための工夫が必要で、金田先生の分析によれば、観光パターンの変化を踏まえたそれぞれの観光に来られる方のニーズにこたえる、きめ細かなメニューがあった方がいいのだらうと思います。それを、北川さんが、既に、かなり具体化する構想を提示していただいたと思うのです。



ということで、課題がかなり鮮明になってきたかと思うのですが、それで、いよいよ屋島の活性化に向けてどういうことが求められているかということで、一部、先ほどの分析の中でも触れていただいている部分もあるかと思うのですが、より具体的な案ということも含めましてお願いしたいと思います。

北川さん、どうでしょうか、続けて、より発展させていくということで構想をお願いします。

【パネリスト 北川フラム】

先ほど申しあげただけで精一杯なんですけど、ただこれは来年まで出来ないと思いますが、面白いのは屋島も含めてですが、岬めぐりの楽しさっていうのが、屋島は海に出っ張ってますから、あるわけなんですね。岬めぐりの楽しみは次の課題だろうと思っています。それをどうしたら良いかと、結構良いお屋敷・別荘が周りにあるんですね。あちらをまわって行くと。あそこで空いているところを借りちゃおうと。それで美味しい、季節ごとでも良いですが、ちょっと誘致して美味しい食べ物が食べれるという、まだ全体的に、自分もこちらの人間にそういうことを言うのは変ですが、一般的に食べ物屋に関しては非常に弱いです。香川に来て、やっぱり、魚を食べたという経験がないという人が多いんですね。だから、そういうことを含めて、岬めぐりの楽しみと料理というものを、屋島ってこれだけ出っ張ってるすごい魅力があるところですから、それをやりたいなと思っています。

もうちょっと先の本眞の話をする、これは現実的にどうか調べないといけません、屋島は上が平らなわけですね。あそこの森っていうものを、本当に何かカテドラルのような美しい森を整備するようなことができないだろうか。そうすると岬めぐりをして天空を見上げるとい、そういったことが出来ないだろうか。それはある意味で言うと源平の鎮護の森であるというみたいなことを考えたいなと思っていますが、まあ後20年ぐらい必要なのでどう頑張れるかというふうに思っています。

【コーディネーター 植田和弘】

ありがとうございます。

それでは、金田さん、いかがでしょうか。今日は、午前中、屋島をまわっていただいたようですので、そういうことも踏まえてお願いします。

【パネリスト 金田章裕】

朝、8時半に頑張って出発いたしまして、久しぶりに、数年ぶりに屋島に行ってまいりました。

一つは観光客が減少しているという話の中で、実際どうなっているのかという現状を確認したかったということもあるんですが、それともう一つは、古代の屋嶋城の石垣の修理復元をしているということなので、それも見たかったというのが本音でございますけれども、それで昼過ぎまで車で案内していただいて、いろいろと見てまわりました。その過程で、実は、私自身はちょっと記憶から落ちていたんですが、千間堂跡という新しく確認された遺構も見学いたしましたし、いろんなことが分かりました。ただ、私は、最初に案内していただいた市の方に、先生、歩かれますかどうされますかというふうに聞かれまして、楽ちんコースで頼みますと言いましたので、ずっと車で案内をしていただきまして、要所、要所、歩いていただけですけども、ここまでは本当であり、半ば冗談も入っているのですが、実は先ほど申しましたように、見学のための多様なメニューのためには、ターゲットをどこに置くかということも大事で、車で行く場合と、それから歩く場合とでは全然コンセプトが違うわけですよ。車だったら駐車場に止めてそれから何を見るかとか、観光ポイントに止めてそこから景色を見るということですが、歩く場合とは全然違っていて、歩行者、歩く場合と車道が一緒になるとバッティングして非常に具合が悪い。もし歩くのであれば、私は、先ほどからこの件につきましても村田さんの方から話がありましたけれども、情報提供は極めて不親切だというふうに思います。

イギリスのイングランドのロンドンから西の方に行くと、コッツウォルズという丘陵地帯がありまして、農村地帯があるんですが、非常に古い農村地帯で、典型的な文化的景観と言っていい所なんですけれども、そこなどは、もうできるだけ公共交通機関で来てくれと、車では出来るだけ来てほしくないという姿勢ですね。それから、団体は基本的にはあんまり歓迎しない。なぜかという、みんな小さなベッド・アンド・ブレイクファストという小さな旅館、民宿的なものが多いんですね。そういう所で、しかしながら、多くの人がリュックを背負って歩くんですね。ところが、今度は歩く時に、農村の中ですから、どこが公共の道で、どこが個人の畑の中の道なのか分からないんです。ですから、地図を買うと、どこが、パブリックパス、つまり、公共の道で、どこがプライベートな道なのか、全部克明に書いてあります。ですから、それは同時にパブリックの方はどうぞ歩いてください。しかし、プライベートの方は、これは個人のものだから入らないでくださいということの意味でもある。そういう情報を出来るだけ丹念に提供しないと、やっぱり歩いていただけないと思うんですね。

歩くことによって、屋島の魅力がもっと増すと思うんですね。ですから、その辺りのターゲットと、それから移動手段ですね。これはきちっと切り分けながらお考えいただいた方がよろしいんじゃないかというのが、実は、今日の一番最初に、歩きますか、楽ちんコースにしますか、というふうに聞かれた時に思ったことでした。

【コーディネーター 植田和弘】

ありがとうございました。

それでは、佃先生からもお願いできますでしょうか。

【パネリスト 佃 昌道】

屋島はやっぱり歩く方が、私は良いと思います。私、今日、北嶺まで歩いて、約2時間ぐらい、久しぶりに行ったんですけども、やっぱり歩くと大変屋島の良さが分かるのかなと。

屋島というのは、確かに山上のルートと、もう一つは海岸沿いと言いますか、海岸沿いのルートと、山の上と山の下のあるのですが、これを結んでいくというのはすごく大事な話なんだろうなというふうに思っています。

そのルート、先ほど、先生からありましたけども、どういうふうに行くのかという話で、一つは歩くということが考えられますし、もう一つは、走るとか、サイクリングを走るとか、あるいは車であるとかいろんな方法で上下を回れるのかなと。山上から北嶺へ、自転車はちょっと難しいかなと思ったりもしながらも、マウンテンバイクだったらもしかしたら行けるのかなとか。いろんな交通手段によって、先ほどありましたけど、いろんなルートマップを作っていくという中で、山の楽しみ方を知る。楽しいとなると、もう一回来てみようかなというふうに思うので、そのような楽しみ方をやるのが良いのかなと思っています。

それで、もう一つは、やっぱり県内の人が屋島を愛してくれないと、なかなか県外の人でも愛してくれないぞということでは、やっぱり小さなころから屋島を愛する、屋島を体験するという刷りこみが大事なのかなと。そして、一つは子どもなんですけど、子どもの前があります。普通、結婚しないと子どもはできませんよね。そうすると、昔はよく屋島に二人で出掛けるというのも、私も思い出もありました。

何がいいかという、屋島の日の入り、要するに日没がすごく綺麗なんです。それで瀬戸大橋開通の時に、観光客がぼっと上がったというのは、実は瀬戸大橋が見える所で太陽が沈む場所というのがあるんですね。そういうところが、例えば、恋人の聖地とかよく言われるんですけど、そういう、まずはデートコースとしての屋島っていうのを、もう一回見直していくと、そこから、今度は子どもを連れて行って、お父さん、お母さんが最初にデートした所と刷り込みが出て来て、その次に、そろそろ中年になって来ると、要するに癒しの中での屋島があって、その後、老人になると、今度はお遍路さんで屋島寺に行こうかと。何かそんなストーリー性が出てくるようなものを作ってくる。要するに、一生ずっと、屋島を愛せるよと、私は、「アイラブ屋島」と言うんですけど、そういうことがすごく大事なのかなと。庵治町というところは、セカチューの映画ですごく有名になったんですけど、そういう意味では、屋島の中で、山上で愛を語るとかですね、そういったキャッチフレーズで、まずは若い人が来てくれるようなものを作っていくことが良いのかなと。

それと、もう一つは、日の出もそうなんです。初日の出というのは、すごくきれいなんですね。これは、屋島の特徴で東が見えるからということで、日の出、日の入、夜景なんです。と



ころが、有料道路が、多分、夜は入れなかったのではないかなと、夜景などはなかなか楽しみにくいというところもありますので、そういう意味では、若者が集いながら屋島の上でいろいろな出会いがあるということが大事なのかなと。

もう一点は、カンカン石を屋島の上で売っています。カンカン石は、ものすごく高い音が出るそうです。それが、すごく癒しに良いというのも聞いたことがあるんですけども、そういう意味で、そのような物も含みながら癒しの屋島コースを作るであるとか、そういうものを考えながら、一つ一つコースを開発していくのかなというふうに思いました。やっぱり、それとともに屋島の海側のところです。そこはお店とか何か作れる所があるんでしょうから、やはり下側の屋島の開発というのも大事なのかなというふうに思ってます。以上です。

【コーディネーター 植田和弘】

ありがとうございました。屋島を愛する人を増やす、いろいろな楽しみ方を具体化するということはとても大事な話だったと思います。

それでは、村田さん、お願いできますでしょうか。

【パネリスト 村田和子】

3つ提言を考えてきたんですが、その前に皆さんのお話を受けて少し感想を。北川先生がケーブルカーの駅が素晴らしいと言われましたが、実は私も色々な口コミを見て、ケーブルカーの山上駅へ行きたいなと思ったんですけど、行き方が分からなくて。ボランティアガイドさんに声をかけたところ、御案内いただいたという経緯があります。

行ってみると、先ほど皆さんおっしゃっていたとおり、ケーブルカーまでのコースは、本当に自然が豊かで鳥の音がこんなにきれいなのかとびっくりしたんですね、私。なので、あの辺りもしっかりと、「道中はこういう楽しみ方ができます」と言ってあげると、ちょっと足をのばしてみようかなと思うのが観光客ですので、非常に皆さんのお話に納得したところです。

では、考えてきた3つの提言に移らせていただきます。まずは「情報戦略の強化」。あと、地元だけではやはり限界があると思うので、「旅行者を味方に付ける」ということ。それから、「点ではなく線での展開」というのを、私、旅行者視点から提案したいと思います。

一つ目の「情報戦略の強化」というところなんですけれど、先ほどからお伝えしていますが、屋島に関しては、市民の方はすごく関心が高いと伺っていますし、私が御案内いただいたガイドの方も、ものすごく知識がたくさんあって、そういったものを、是非、しっかりアウトプットしていただきたいなど。みんながみんなガイドさんに案内いただければ良いですけども、人数にも限りがあるでしょうし、自分で見て楽しめる環境整備というのは、是非していただきたいなど。

あと、「魅力ある歴史、自然、背景を明文化」と、難しく書いてしまったんですけども、屋島の魅力って、見ただけで分かるものもあるんですが、説明が加わって、初めて魅力が何倍にもなるものが多いかと。例えば、歴史的なものって説明されないと、見て、ふうんって終わってしまう。情報が付加価値を生んでいく魅力が非常に多いと思うので、ここは是非考えていただきたい。何か物を作るというのは、やっぱりお金も掛かりますし、屋島の場合は、いろいろと制約が厳しいと聞いています。情報整備というのは、熱意があれば結構できる場所もありますので、取り組んでいただきたいなと思ってます。

それと、「散策マップは必須」と書いたんですけども、たかが地図と言われそうですけども、やはり行きたい場所にスムーズに行けるということは、最低限のホスピタリティだと私は思っています。更に、地図の中に情報があると足をのぼす、先ほどから滞在時間を延ばすというのが課題になってますけれど、そういった効果も非常に高いと思いますので、是非ここは御検討いただきたいなど。

あとは、市民の方にまず屋島に来ていただいて、市民の方が旅行者の立場で情報を発信するという流れも作っていただきたいなど。そういったことを通して、初めて、市外・県外・四国外・世界へっていうふうにつながっていくと思うんですね。遠方になればなるほど、先ほどお伝えしたお金と時間が掛かりますから、旅先への期待値というのも上がって来ます。まずは近くの方から「屋島っていいな」という情報を、うまくまわして行ってほしいなと思っています。

「旅行者を味方に付ける魅力造成」というところでいくと、先ほどからお話が出てたんですけど、誰に向けてということイメージして、メニューをそろえて情報というのでも発信していかないと、「自分に関係ない」とスルーされてしまうので、工夫が必要です。訪れた旅行者というのは味方に付けると勝手に宣伝してくれます。なので、是非、個人の発信力をうまくはぐくむ工夫というのもしていただきたいですし、ターゲットに応じて、物や事というものを絞り込んでPRするというのも大切なことというふうに思っております。この辺りちょっとうまく説明する自信がなかったので、事例を2つほど御紹介したいと思います。

北海道のトマムの雲海テラスと姫路城の例を御紹介します。

こちら、北海道のトマムリゾートという所がございまして、もともとは、冬のスキーがメインの所なんですね。夏はアウトドアと言うものの、北海道はアウトドアができるところがたくさんありますので差別化できない。何か魅力は無いかというときに、社員でお話をされてロープウェイの整備をされている方が、「実は夏に素晴らしい雲海が出るんだけど、これが観光素材にならないか」というところから、夏のメインの観光素材にしていって、今では夏場の4カ月の間に、6万人の集客をする魅力になっています。

これは魅力を発見したというところもすごいですけれども、もう一つ私が感心したのは画面の右側なんですね。登るときのロープウェイのチケットがハガキになっていて、上に行くと「雲海ポスト」があります。ここには「感動を、あなたの大切な人に伝えてください」と書いてあるんですね。「切手はいりません。オリジナルのスタンプを押してお届けします」と。これ、素晴らしいと思いませんか？やっぱりこう書かれると大切な人に送りますし、受け取った側にとっては大切な人からの口コミとなってきますので。私は、トマムリゾートの雲海テラスが有名になった一つのきっかけになったんじゃないかなと思っています。大体、感動した時というのは誰かに言いたいものですので、そういったところもうまく要望にこたえつつ、情報が広がっている例として御紹介をしました。

そして、もう一つが姫路城なんですけれども、屋島も歴史的な背景があるということで御紹介をしようと思います。今、姫路城は改装中で、天守閣に覆いが架かってしまっているんですけども、その前の話なんですけど、姫路城で天守閣が一番綺麗に見える所にですね、実はお殿様とお姫様がいらっしゃる。これはボランティアの方なんですけど、もう一人、ボランティアの方がいらっしゃって、画面右側ですね。写真撮影ボランティアということで、英語でも、シャッタークリッカーって書いてますね。要は、お城が一番きれいに見える所で、お姫様、お殿様と一緒に写真を、しっかりとした形で残してあげようというおもてなしになっています。やはり、

思い出というのは時間とともに風化してしまいますし、記憶だけではなくて記録に残してあげる。そういったフォローというのがダイレクトじゃないんですけども、口コミとか旅の満足度を上げるというのに非常に役立っています。良い写真というのは、インターネット上でも共有と言うか、広がりやすいんですね。なので、綺麗な写真をしっかりと思い出として残してあげる。そういった工夫というのは非常に有効じゃないかなと思ってます。なので、先ほどの北川先生の話聞いて面白いなど。多分イベントが始まると、いろいろネット上でも作品の写真とかが出てくるんだろうなと思ったんですけども。

先ほど言い忘れてしまったんですが、私、北海道のトマムの例を見たときに、屋島の夕日、でも同じことが出来るんじゃないかなと思ったんです。夕日に関して言うと、私、今回、夕日をすごく見たかったんで粘ったんですが、最終のバスでは夕日見れないんですね。だから、これも、是非改善いただきたい。折角の魅力なのに最終バスの時刻には、まだ太陽は高い状態だったんです。データを拝見しますと、シャトルバスも、やや人数的にはちょっと厳しい状況かなと思いますので、夕日に合わせてバスを毎日出すとか、そういった施策もされると、感動体験される方が増えるんじゃないかなと思っています。

最後に、「点でなく線での展開」ということで、フィールドミュージアム構想というのが報告書の中にあって、これ、旅行者視点でいいかなと思って拝見しておりました。ただ、屋島と屋島の近辺でということを書いてあったんですけども、旅行者、特に遠方の旅行者は、残念ながら、屋島だけ目指してはなかなか来ないんですよ。やっぱり飛行機に乗って来る以上は、行きたい場所がたくさんありますので、是非、高松市内とか香川県内、そういった所も含めて、連携とか協力をして行っていただけると、より屋島の認知が上がっていくんじゃないかなと思っています。以上です。

【コーディネーター 植田和弘】

ありがとうございました。

4人のパネリストの皆さんの御発言は、いずれも屋島の活性化に向けて、大変示唆的だったと思うのですが、会場の皆さんもいろいろと感じられたことがあって、御意見もあるのじゃないか、あるいは、御質問もあるかと思えます。そしたら、何か御発言したいという、それから御質問の場合はどなたにということをお願いできますでしょうか。挙手をお願いします。

ではそちらの方から。

【参加者①】

すみません。いろんな貴重な御意見を聞かしていただいてですね、ちょうど10年前、前市長の時にですね、私、高松市のモニターをさせていただいて、まだまだ、そこまで屋島は、今ほど衰退していなかったんですけども、そういう再生化の意見をいろいろ交わしたことを思い出しておるんですけど。それは、ちょうどテレビで「義経」のドラマやってたときなんですね。今、お話を聞いててですね、僕は、高松市が創造都市を目指しておられるわけなんですけども、それと合わせてですね、我々日本人というのは、東日本大震災によってですね、物だとか形にこだわらずに、日本人の心に根ざした、そういう地域の再生と言うかですね、今、お話を伺っていると観光の話ばかりだと思うんですけど、やはり、私はいつも朝起きて屋島を見て、ああいい郷土に住んだなど。やはり僕は、高松の人はやはりそういうことをみんな抱いておる

と思うんですよ。だから、そういう、自然、それから生活とか気候とか風土とか歴史とか信仰とか、そういうものをもう一度見直してですね、まず、高松の人がそういうものの良さを見直す、もちろん外部からも来ていただくのも大事ですけれども、やはりそういうことによって、日本全国に、今、そういう創造的な価値というものが見直されてきておると思うんですけれどもね。私は今話を聞いて、観光も大事だけでも、持続的発展で、みんな、若い人も年寄りもそうなんですけれども、そういうニーズを満足するようなことを時間を掛けて作りあげていくということが、高松市の創造都市につながるんじゃないかと思うんですけれども。どなたか、金田先生、御意見をよろしく。

【コーディネーター 植田和弘】

回答は、後でまとめてお願いしたいと思います。
他にいかがですか。

【参加者②】

今日は皆様、先生方、お疲れのところ、ありがとうございました。

私は、実は屋島に住んでおりました。あそこにある四国電力のアパートで、ずうっと、昭和34年から47年まで住んでおりました。屋島に、一番観光客が大勢みえられていたころです。だから良く覚えているのは、映画俳優、今も御健在ですけれども、小林 旭さんが来てサインをもらったとか、そういったことを皆さんよくおっしゃってました。

でも、つい最近、屋島に登りますと、本当に犬もいない猫もいない、何にもいない、ほんと、人っこ一人いない、これはなぜなんだろうと思いました。文化的価値が全くないからだと思いました。せっかく屋嶋城が発見されたから、坂出にもありました。私たちが生きているということを実感しない。そういった意味で、金田先生とおっしゃるんですか、先生よろしく願いいたします。

文化的価値、そして歴史の中に、この千年、二千年、あるいはずっと何万年という歴史の中に私たちがいるということ、それを誰一人として、まあ一人ぐらいいらっしゃると思うんですけれどね、思う人が、考えてる人がいないということ。普通、誰も考えないということ、そのことを、だから、岡山のお城の古城辺りには400万人という人が訪れるらしいですけどね、屋島はその4分の1でもいいですから、また多くの観光客を呼び戻したいと思っております。住んでいたものの一人として、強く望むところです。失礼いたしました。

【コーディネーター 植田和弘】

ありがとうございました。

他に手を挙げられていたと思うのですが、どなたかいらっしゃいますか。お一人だけですね、そのお一人で最後にさせていただきたいと思います。その後パネリスト皆さんに感想やまとめ、メッセージがあったらと思いますので、お願いしたいと思います。

御質問か御意見かお願いします。

【参加者③】

長い時間いろいろ貴重なお話をお伺いさせていただき、ありがとうございます。

私、市内でございまして、週3回ぐらい屋島へ渡っております。登っております。ですから、いろいろな皆さんの先生方のお話をお聞きさせていただいて、真剣に考えていただけているんだなということがよく分かりました。この前におっしゃられた方が、非常に寂しい。私も同感でございまして。ほんまに朝の7時、誰もいない。という時があります。10時、11時でも、どしたんな、誰も来てないのかな、そしたら、お寺の方からお参りに来られたお客さんが出てこられて、ああ、あちらには来てるんだな。私、非常に寂しいときがあるんですけど、ただ、屋島に登ったり降りたりしてますと、常連の方、いつも、中には日に10回ぐらい登ったり降りたりしてる。なぜか後で考えてみますとですね、平成16年からですね、記録を付けるようになりましてですね、それでその記録を付けるために、この人、一日中このようにしてるのかと。家族の方はどうしているのだろうかとか考えることがあるんです。それはその方の考えですから結構なんですけど、月に1度、2度、付けておられる方もいらっしゃるんです。これもいいと思います。

さっき先生の中でおっしゃられていた、屋島のケーブルの駅のあの建物なんか素晴らしいんです。誰も分からないんですよ、あそこの所を見に行きたい、観光客の方が行くコースも分からない。だから、先ほどおっしゃられたように、猪の檻が2か所あります。ありました。その檻に、確かに猪が入って捕まったのを、私、現認しました。だから、豚でも置いておいたらどうやとおっしゃってございましたけど、その檻のすぐそば、すぐ南手に屋嶋城の工事をしてるわけです。分からないんです、観光客。この前も、岡山から、総社の鬼の城を見たんで、屋島にもお城があるというので来ましたんですけど、うろうろしていて、聞いたら、それを見に来たのですがどこにありますか。ああすみません、ここ降りた所に、今、工事中ですので、まだ鬼の城のようなものではなくて、石垣を確認してる段階です、と言ったら、そうですか、鬼の城と同じものが屋島にも出来てるんだと思って来たんです。毎日通っていても屋嶋城がどこにあるか。工事をしたらこの路地を降りた所に、工事してますという看板一つありません。案内一つありません。ですから、わずかな予算でいいんです。危なかったらそばに寄らなければいいんです。その見れる所まで、ちょっとした配慮があったら、そういうちょっとした配慮が、今、屋島には欠けてる、高松市が欠けてる、観光客を呼びなさい。短時間でも行けるコース、長時間のコース、上だけでなく下の路地もずうっとすごいんです。いい所いっぱいあるんです。そういうことをですね、そしたら、屋島のケーブルカーの奥へ行ったら絶景の眺めの所がある。ここから飛び降りたらすごいだろうなという所もあるわけなんです。本当にいっぱいあるわけですけど、もうようけ言いません。一つよろしく御検討をお願い致します。

今、本日のお話を聞いて、今年から確かに楽しみが増えるな、明日からみんなに会ったら、今度は考えてくれるぞと話しておきます。一日に上がって降りるまでに100人ぐらい声はかけられております。そりゃ常連ですからあまりいかんですけど、今度は明日からそう言うておきます。お願いします。

【コーディネーター 植田和弘】

ありがとうございました。

先ほどの佃先生の言葉で言えば、「アイラブ屋島」の人が多いと私は思いましたが、その会場の人に、あるいは、より広く高松の人たちに向けて、それぞれのパネリストの皆さんから最後のまとめ、メッセージを一言だけで結構ですのでお願いしたいと思います。

会場から御意見をいただきましたが、もしお答えをと言うことであれば、それも兼ねていただけたらと思います。

今度は、村田さんからお願いできますか。

【パネリスト 村田和子】

長い時間どうもありがとうございました。

今も、皆さんのお話を聞いて、「アイラブ屋島」、私も外からの人間なので、非常に感じる場所がありました。

先ほどロコミサイトを御紹介したんですけども、そのサイトを見ると、私も感じたんですけども、香川の方は、とっても親切でフレンドリーに話しかけてくる、というふうに言われている方が多いんですね。なので、是非そういったところも、今後続けていただくというのも変なんですけど、良さだと思います。あとは、今の地元愛というのは、これだけ地元の方が愛している、好きな場所というのは、行ってみたいという需要喚起に、絶対つながります。是非、皆さん、それぞれで活動をされると思いますけれども頑張ってください。私も何か機会があれば、いろんな形で屋島を宣伝したいと思います。

どうもありがとうございました。

【コーディネーター 植田和弘】

佃先生、お願いします。

【パネリスト 佃 昌道】

はい、すみません。「アイラブ屋島」が効きすぎたのかもしれませんが、私、思うんですけど、やっぱり一人一人が情報発信者ではないのかなと思うんですね。

私、毎年、サポートから屋島まで学生と一緒に歩きます。約10kmぐらい半日かけて。最初は少なかったんですけども、ロコミが増えてくるんですね。それがやっぱり一人一人が頑張っていけないと、屋島って良くなならないんじゃないかというふうに思ってます。行けば、また新しいものが見つかって、それを人に伝える喜びが出てくる。それは、実は、屋島はいっぱいあるんですよ。いっぱいあるからいっぱい伝えられることが出来る、ということが大事なんじゃないかなというふうに思ってます。

確かに、実は看板はひどいです。環境省の看板、それから香川県の看板、それから、高松市の看板、この辺りがいろいろと出ていますので、その辺りは今後ですね、インフォメーションとして統一化されるとよろしいかなと思うんですけども、それもですね、やはり市民の方々がいろんな形でものを言うていくことによって変わってくるのかなと、それがやはり屋島を愛することではないかなと私は思っております。

【コーディネーター 植田和弘】

ありがとうございます。

金田先生、お願いできますでしょうか。



【パネリスト 金田章裕】

先ほどの御質問の中に観光だけでいいのという話がありました。それは、決して観光だけでいい、基本的にそんなことはあり得ないんですけど、屋島は、先ほどからのお話は出ておりませんでした。屋島の史跡と天然記念物の範囲内にたくさんの方が住んでおられます。だから、史跡の所に住んでおられる、すごい贅沢な居住だと思えます。その方々も、それだけの方が史跡内に住んでおられる史跡というのは他にあるかどうか、そういう目を見たことがないのでちょっと分からないんですけども、その方々も含めて、その地元の方、それから外からの観光客を含めて、その文化的な価値を理解して、それを大切にしていきたいというのが基本的なところでございます。

サステイナブルという話も出ましたが、御承知のように、10年以上前になりますが、国連でブルントラントというノルウェーの元首相が提唱した考え方ですけども、サステイナブルディベロップメント、サステイナブルな生活というのは、自分の世代で必要以上に資源を使いすぎない、次の世代に、次の世代が必要とする資源をちゃんと残してあげることというのが、サステイナブルディベロップメントです。

ですから、屋島の良さを今の段階で使い尽くさないで、将来に渡って使えるようにしていくというのが、サステイナブルな形での屋島の在り方であろうというふうに思います。そういう方向に向けて、いろんなことを御検討いただけたらありがたいというふうに思います。

【コーディネーター 植田和弘】

ありがとうございました。

最後に、北川さん、お願いします。

【パネリスト 北川フラム】

島というか山というか、一つのこういう歴史的な場所に対して、こんなにみんな熱心な人がいるというのは、僕は本当驚きましたね。ちょっと恐怖です。ちゃんとしっかりと考えないといけないなと思いました。

【コーディネーター 植田和弘】



ありがとうございました。

私、今日コーディネーターということでもございましたけれども、4人のパネリストの皆さん、会場の皆さんも感じられたと思いますが、パネリストのそれぞれの御発言、御提言は大変貴重なものだったと思います。私なりに新しいデザインが求められているというか、屋島はいろんな資産を持っているのですが、それをうまくつなげるとか、あるいは、北川さんは海とのつながりという、あるいは過去とのつながりという形で、資産をもっと広げて再設計するというか、そういうことが必要だと言ってくれました。それから、美しい感動とか美味しいとか知る楽し

みとかそういういろんな楽しみ方を、この場で出来るようにするか、そういうことがとても大事であるということです。そのために、屋島で用意しないとイケないものがたくさんあるということで、我々にとっての具体的な課題もかなり提起されたと思います。

また、情報や口コミになるようにしていくこともとても大事だということで、私、今日会場に来られてる方が中心的な参加者として、そういうことに取り組んでほしいなということを強く思いました。今日のような提言を頂いて、それを具体化して実践していくためには、もちろん専門的な知識が大変必要ですし、専門家にも御協力いただかなければなりません。どなたかの御発言にもありましたように、屋島や高松にいる人自身が、それに取り組むということなくしては、成功しないことは間違いないと思います。今後、そういう形で進めていくということをまとめていたしまして、今日のパネルを終わりたいと思います。

パネリストの皆さんに、本当に感謝したいと思います。

どうもありがとうございました。